

北京の古書オークション

岡崎 由美（文学部教授）

中国では1990年代後半から、オークションが盛んに行われるようになった。ネット・オークションやテレビ・オークションも含め、書画、骨董、美術・工芸品はもとより、切手などコレクターズ・アイテムから、自動車、家具、抵当品、さらに不動産、土地使用権、知的所有権、工業所有権など種々の権利に至るまで、オークションで取引されている。

その中で、我々文学の研究をしている者に関係が深いのは、中国語で「文物」と言われる歴史的な文化財、特に古書である。珍本、稀覯本との出会いもさりながら、古書の流通状況や中国の知識人による蔵書コレクションの形態、それに基づく時代の知の枠組みといった文化史の一端に触れる貴重な機会だ。これまで、オークションなどというものは、およそ縁のない世界と置いていたが、2004年11月、北京で大規模な古書オークションが開かれ、内覧会で貴重書が見られるというので、文学部の稲畑耕一郎教授の提案により、大学院生3名と共に北京へ赴いた。こうしたことも、大きく変わり行く中国の姿であろう。

文物の国際的な規模のオークションはおおむね春と秋、5月頃と11月頃に行われ、北京に限っても、2004年の11月は、10件前後の大型の文物オークションが、内覧会も含め5日～1週間ほどの日程を取

り、ホテルを会場にして開催されていた。

11月初旬に北京入りした我々は、中国嘉徳国際拍賣有限公司と北京海王村拍賣有限責任公司の内覧会を参観することとした。嘉徳は1993年5月に発足した全国規模の総合オークション会社であり、国際的なオークションを開催している。海王村は中国書店の投資により1996年に発足、老舗の書店の強みを生かして、古書、拓本、著名人の書簡や文書などを主に扱う。海王村と経歴が似たものには、北京榮宝拍賣有限公司がある。清朝末期から100年の伝統を誇る美術商、北京榮宝齋の系列会社である。

北京の文物オークションは、北京文物局の管理下にある。『中華人民共和國文物保護法』の規定により国外持ち出しが禁じられたものもかなりあるが、現物を見るだけでも滅多にない体験である。

さて、嘉徳の内覧会で慶應義塾大学斯道文庫の高橋智助教授と合流し、古書を見る。会場は崑崙ホテルのバンケット・フロアを占め、古籍、書画、古美術、油絵、古銭、陶磁器、明清家具などそれぞれ区分けされ、ジャンルごとに分厚いカタログが販売されている。その中の一室で白手袋を渡され、唐の写経、宋版、元版、明の銅活字本などが運び込まれてくる。書誌を取るうち次第に感覚が麻痺してくるが、いずれもこののちガラスケース



北京海王村の内覧会

に鼻を押し付けて拝めれば僥倖、中国の図書館の貴重書書庫や好事家の書齋に奥深く納まってしまうと、触ることはおろか、まずおいそれとはお目にかかれないものばかりである。

今回の嘉徳オークションの目玉の一つは、著名な蔵書家陳清華（1894 - 1978）のコレクションであった。陳清華、字（あざな）は澄中、祖籍は湖南省祁陽、生まれは江蘇省揚州である。少年時代に父を亡くすも、刻苦勉強して上海の名門復旦大学に進み、さらにカリフォルニア大学バークレイ校に留学して経済学を修めた。帰国後銀行家として財を成し、1930年代ごろから古書の蒐集を始め。その蔵書量は膨大なもので、質も高く、天津の蔵書家周叔弢と並んで「南陳北周」と称された。

経学や詩文など古典の教養も深い実業家というのは、中国の伝統的知識人の一典型といえるであろう。文学と経世済民が深く結びついた中国の儒教的伝統ということもあるであろうし、また中国では近世以降、知識人の商業活動への参入が盛んになり、私財を惜みず蔵書を集め、書院（学塾）を開き、文化人が交流するサロンを設けて、知の継承に寄与してきた歴史がある。

陳清華は1941年以後教育に専念し、江西の中正大学中文科主任、復旦大学経済学科教授など幾つもの大学で教育職を務めた後、1949年退職して香港に移り住む。1950年代に一部の蔵書を手放すが、それは北京図書館（現中国国家図書館）に収められている。

陳清華は1967年アメリカに渡り、84歳で病没した。アメリカに残した蔵書は妻子が相続したが、今回嘉徳のオークションに出品されたのは、この子女が相続した蔵書である。また、陳清華が上海を離れた際、旧宅にはなお大量の蔵書が残されており、それは文化大革命時代に没収された後、遺族によって改めて国家に寄贈され、上海図書館に収められた。

陳清華旧蔵書は保存がよく、文献としての価値が高いのみならず、改めて目を引くのは、蔵書印の数々である。蔵書印はそれ自体篆刻の美術的価値もあるが、同時に書籍がどのような人々の手を経て、学問教養を伝えてきたのか、ということを知る重要な手がかりになる。

さて、嘉徳のオークションは帰国日と重なって

参観できぬため、これに参加する日本の書店に入手希望の書籍を伝え、海王村の内覧会に向かう。こちらはオークションにも参加した。会場は、琉璃廠の海王村公司自社ビルの大会議室。会場最前列には、競売買代行の会社スタッフが陣取り、依頼主と電話をつなぎっぱなしで競り合う。ここで我々は『善本留珍譜』を入手。これは宋・元・明・清刻本および和刻本の残葉を三十三種集めたもので、古籍流通の一つのあり方を示す資料であり、中国書誌学実習の格好の教材でもある。

帰国後、嘉徳のオークションで購入を希望していた古書が入手できたと知らされた。『倭袍伝』という清代の語り物芸能の木活字本で、中国の古典小説研究、芸能研究、方言研究の貴重な史料であるが、清代の度重なる禁書、禁演に遭い、伝本の稀なものである。本学の風陵文庫蔵書に類する資料といえよう。

この二部の書籍は、本学中央図書館に収めた。また今回の調査については、2004年12月22日に、21世紀COEアジア地域文化エンハンシング研究センターの活動の一環として、中国古籍文化研究所主催のシンポジウムを開き、「中国における古籍流通学の確立を目指して」とのテーマで、調査参加者が各自発表を行った。近々刊行の本研究所機関誌にも論文および報告を掲載する予定である。

顧みれば本学図書館にも先学の種々膨大な旧蔵書が収められている。我々後学がそれを継承して十分に活用するのはいうまでもなく、その蔵書を質量ともに発展させていく責務もあるだろう。中国歴代知識人の書齋から書齋へ集散を繰り返してきた古書の歴史を垣間見つつ、改めてそう思った。



嘉徳の内覧会にて